

『公害の経験を未来につなぐ— 教育・フォーラム・アーカイブズを通した公害資料館の挑戦』

清水万由子、林美帆、除本理史編著
ナカニシヤ出版 2023年3月 (2,500円+税)

公害資料館ネットワークでの議論の蓄積を、研究書にまとめました。公害経験の継承に向き合い、公害経験の多面性を理解し、公害経験が持つ普遍性を考える一冊です。

報告書完成！

公害資料館連携フォーラム in 長崎

当日の記憶がよみがえる
2021年12月長崎で、会場とオンラインのハイブリットで開催したフォーラムの記録。オンラインツアーから、全体会まですべての記録を掲載しています。A4サイズ97ページ、1冊千円。
ぜひ、ご活用ください。注文はWEBサイトから。

会員募集

公害資料館ネットワークに参加しませんか

公害資料館ネットワークでは、一緒に公害からの学びを広げていただける会員を募集しています。会員になると、会の運営に参加したり、研究会への参加や公害資料館連携フォーラム参加費の割引、報告書の提供を受けることが可能です。
「公害を学び・伝える」取り組みについて、共に考えませんか。

年会費

【個人】
●正会員：3,000円 ●賛助会員：2,000円以上

【団体】
●正会員：10,000円 ●賛助会員：8,000円以上

WEBサイトから入会申込書にご記入の上、事務局までご連絡ください。
年会費は、下記口座にお振り込みください。

●ゆうちょ銀行 記号15440 番号374245461 公害資料館ネットワーク
(他銀行から振込場合：店名五四八店(ゴヨンハチ店) 口座番号3742546)
※会費の納入がまだの方も、上記口座へお願いします。

公害資料館 ネットワーク

だより

2022年度

多様なつながりと活動の広がりを目指した
公害資料館ネットワークの活動

- ・公害資料館連携フォーラム in 福島 2023 プレ企画
見学会「原子力災害考証館 furusato」
福島大学・後藤忍 環境計画研究室による企画展示
トークセッション「福島の経験を継承する」
浜通り現地見学
- ・研究会報告（教育研究会、資料研究会）
- ・公害資料館バザール
- ・書籍紹介「公害スタディーズ 悅え、哀しみ、闇い、語りつくす」
- ・「公害資料館ネットワーク共通パネル」の貸し出しをおこなっています

発行：公害資料館ネットワーク 2023年3月30日 発行
事務所：〒712-8034 岡山県倉敷市水島西栄町13-23 公益財団法人水島地域環境再生財団(みずしま財団)内
H.P <https://kougai.info/> kougashiryoukan@gmail.com

地球環境基金の助成金で作成しました

地球環境基金



公害資料館連携フォーラム in 福島 2023 プレ企画 トークセッション「福島の経験を継承する」 & 浜通り現地見学

2023 年度に福島で開催する公害資料館連携フォーラムの
プレイベントとして、福島県でトークセッションと
現地見学会を行いました。

2023年1月21・22日 主催：公害資料館ネットワーク
協力：地球環境パートナーシッププラザ (GEOC)

記録作成：小橋 伸一（大阪公立大学大学院生）



プレ企画報告

2023 年度、福島県で予定している「公害資料館連携フォーラム」のプレ企画を 1 月 21 日・22 日に行いました。公害経験をどう未来につなぐか、公害と同じ社会的災害に属する原発事故・原子力災害の経験継承の取り組みを踏まえて考える機会としました。

21 日は、原子力災害考証館 furusato が開設されている、いわき市の温泉旅館・古滝屋を会場に、それぞれの立場で原発事故・原子力災害の経験継承に取り組む方々をお招きしてトークセッションを行いました。参加者は 53 名（オンライン：138 名）で、会場は立ち見の方が出るほど満員でした。

22 日はバス移動で現地見学を行いました。脱炭素社会に向けて、エネルギー政策の大きな転換期を迎える現在、炭鉱開発を行われたいわき市の歴史を改めて学ぶべく、産業遺産の見学から開始しました。その後、双葉郡にある伝承施設、とみおかアーカイブ・ミュージアムと東日本大震災・原子力災害伝承館を見学しました。参加者は 38 名で、タイトなスケジュールの中、密度の高い学びとなりました。

1日目

見学会 「原子力災害考証館 furusato」

原子力災害考証館 furusato は、今回のプレ企画の会場にも使われた温泉旅館「古滝屋」16代目の現当主、里見喜生さんが、館内の宴会場を改装して 2021 年 3 月 12 日に開設しました。トークセッション終了後、希望者を対象に、里見さんにによる説明を交えた見学会が行われました。

考証館は「復興」のかけ声に書き消されがちな、当事者の「声なき声」の発信と、多様な人々による立場を超えた対話を目指しています。

見学会では、大熊町の津波被害で長い間行方不明だった少女の遺品や写真（※後述の木村紀夫さん所蔵資料）、建物の解体が進む浪江町への想いを地元出身の歌人が記した短歌、浪江町にある商店街の風景が変化していく様子がわかるパノラマ写真、原発事故の集団訴訟関連の資料などが紹介されました。



福島大学・後藤忍 環境計画研究室による企画展示

福島大学の後藤ゼミが作成したパネルがトークセッション会場の入口に展示されました。タイトルは『"減思力"の教訓を学ぶためのパネル展—東京電力福島第一原子力発電所事故前後の原子力・放射線教材等の記録—』です。



当日は教員・学生が現場で解説も行いました。

「減思力」とは、原子力発電の環境リスクについて安全性が過度に強調されるなど、国民の公正な判断力が低下させられてきたのではないかという教訓を表す造語です。

パネルでは、行政が学校等の教材として、原発事故前後に発行した原子力・放射線副読本を対象に、記述内容やその変化を検証しています。国の負担でつくられ、今回の現地見学先でもある東日本大震災・原子力災害伝承館の展示についても触れられていました。

1日目

◎トークセッション

「福島の経験を継承する」



1日目のトークセッションでは、経験継承に取り組む7人のお話を伺い、その後コメントーターの2人からコメントがありました。

●日 時：2023年1月21日(土)14:00-16:30

●会 場：いわき湯本温泉「古滝屋」(原子力災害考証館 furusato)

●参加者：会場・53名(マスコミ含む) オンライン・196アクセス(138名)

◎パネリストより◎



内山 大介さん
(福島県立博物館)

福島県立博物館の活動は、震災以後、文化財のレスキューから、震災を物語る様々な資料を未来に引き継ぐ「震災遺産」として収集することへと展開してきました。収集に携わった個々の学芸員のメッセージも重視してきました。今後は我々が一方的に発信するというよりは、皆が震災遺産から多様な経験や記憶を想起し、語り合う博物館になればと思います。



筑波 匡介さん
(福島県立博物館)

震災遺産を活用した、会津若松地域(県博所在地)の防災教育に携わっています。重要なのは子どもたちが目の前の資料から主体的に考え判断できるようになること。授業では震災遺産をめぐり、よい「問い合わせ」を投げかけ創造的な対話がなされることを目指しています。「問い合わせ」と「震災遺産」の組み合わせは、災害伝承の持続可能性の獲得にもつながると考えています。



門馬 健さん
(とみおかアーカイブ・ミュージアム)

とみおかアーカイブ・ミュージアムでは、自然災害・原子力災害を富岡町の歴史にきちんと位置づけるために、震災以前の町の日常や成り立ち、特徴、原発がもちこまれた経緯が分かるように展示をつくっています。震災関連の展示では、資料の背景情報をつまびらかにしており、そこから引き出す震災の教訓に関しては、来館者それぞれの解釈に委ねています。



瀬戸 真之さん
(東日本大震災・原子力災害伝承館)

伝承館は、地震発生時の状況から、復興の取り組みまでを6部構成で伝えていますが、状況の変化に応じて展示替えもしています。また、特定の地域に焦点をあてたり、県外に出張したり、子ども向けに絵本を活用したりと、様々な企画展示もしています。速報性重視の観点から、避難指示が解除された直後に、その地域の震災後の歩みや現状を取り上げています。



里見 喜生さん
(原子力災害考証館 furusato)

震災の経験でも、特に原子力災害では声にならない声が多くあることに気づき、様々な立場の人が対話できる民の施設をつくろうと思いました。自分も展示をつくってみたいと思ったとの来館者の声がありましたが、各人がちょっとしたスペースに資料を残していく取り組みが広がり、そこにつながりが出来るといいのではないかと思います。



小野 陽洋さん
(いわき語り部の会)



木村 紀夫さん
(大熊未来塾)

大熊町の自宅が津波で流され、家族を失った経験を経て、伝承活動をしています。活動のテーマは①「防災」と②原発事故などの犠牲の上で成り立っている「豊かな世の中への問い」です。講演・講話だけでなく、震災の痕跡が残る場所の案内もしながら、参加者が震災経験を自分事にしていくことを目指しています。活動継続のための課題に悩みつつ、地域の復興のあり方についても考えています。

◎コメンテーターより◎

公害として福島原発事故を考えるには、加害一被害、特に放射能汚染を人権や社会的公正の問題としてみる視点が重要です。

復興も、将来世代にどのような暮らしを手渡すかという長期的視野が必要です。



藤原 遥さん
(福島大学)

公害の経験を継承するには、多視点性や問い合わせ重視してお互いに学びをつくっていく必要があります。それぞれのやり方で活動をされている皆さんに学びたいと思います。



林 美帆さん
(みずしま財団)

2日目

浜通り現地見学

福島県は「浜通り」「中通り」「会津地方」の3地域で構成されています。今回は津波災害にあった浜通りに焦点を定めて見学会を開催しました。温泉から石炭、原子力とエネルギーの変化と共にあった浜通りを体感する一日となりました。



バス車内での案内・解説は里見喜生さん

■ 炭鉱ヘリテージ

いわき市では、福島県富岡町付近から茨城県日立市にかけて南北に広がる常磐炭田の一角として、江戸時代末期から約120年にわたって石炭の採掘が続けられました。今回は、そうした産業遺産を伝える活動を続いている、いわきヘリテージ・ツーリズム協議会の方々のガイドで見学を行いました。

まず、1855年に石炭が発見され、炭鉱開発のはじまりとなった弥勒沢（現・内郷白水町）に向かいました。現地では、採炭現場の復元がなされています。また、かつての坑内労働者が個人で開設した資料館もあり、作業に使われていた道具などが展示されています。その後、内郷礦中央選炭工場跡に向かいました。ここでは、採掘した石炭からズリ（捨石）を取り去り、品質や種類で選別する作業が行われていたといいます。



■ とみおかアーカイブ・ミュージアム

とみおかアーカイブ・ミュージアムは、2021年7月11日に富岡町が開設した伝承施設です。原発事故による全町避難、警戒区域の再編を経て、家財の整理や家屋の解体等で失われかねない地域資料を収集する目的で、町でプロジェクトチームが組まれたことが淵源にあります。当日は、学芸員の門馬健さんのガイドで見学を行いました。展示は、津波や原発事故によって失われた住民の日常をテーマとしています。入口付近のタウンギャラリーには、昭和20～40年代の町の商店街が模型で再現されています。常設展示室は大きく2つに分かれ、片方は富岡町の成り立ちやその特徴がわかる地域資料が展示されています。もう片方は、震災を伝える展示で、町民の避難誘導にあたったパトカーが置かれていたり、当時の災害対策本部の様子が再現されています。



■ 東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災・原子力災害伝承館は、2020年9月20日に福島県が双葉町に開設し、公益財団法人「福島イノベーション・コースト構想推進機構」が運営する伝承施設です。国の交付金で建設され、「収集・保存」、「調査・研究」、「展示・プレゼンテーション」、「研修」の4部門が設けられています。当日は学芸員の瀬戸真之さんのガイドで見学を行いました。

展示の内容は、地震発生当時の様子を伝える映像に始まり、当時の住民の行動、日常の変化、原発事故直後の状況や事故の影響、行政や県民の復興の取り組みなど多岐にわたります。また、語り部講話や地域交流のスペースも設けられています。見学後は、隣接する交流拠点、双葉郡産業交流センターの屋上展望台から福島第一原子力発電所を臨みました。



フォーラム in 福島に向けて

大阪公立大学・公害資料館ネットワーク幹事 除本 理史



「公害資料館連携フォーラム in 福島 2023 プレ企画」では、福島原発事故を公害として捉えることについて、様々な意見が出た。

定義にもよるが、言葉の問題として、原発事故による環境汚染を公害でないと主張するのは難しいだろう。問題は、公害と捉えることで何が見えてくるのか、ということだ。

個々の事案はそれぞれ異なるから、違いを強調しすぎると共通性を見出しつづくなる。もちろん地元の方々が押しつけがましい感じるようではいけないし、原発事故の前提には自然災害としての津波被害もある。あまり結論を急がず議論を継続することが大事だと思う。フォーラムの実行委員会はすでに立ち上がっているので、より幅広い視野から様々な問題を論じられるよう、準備を重ねていきたい。

公害教育研究会を開催しました

「公害経験の継承と公害資料館 —四日市を事例として—」



会場報告 (清水万由子さん)

オンラインで三重県と (伊藤三男さん)

日 時：2022年8月28日（日）14時～16時
場 所：東京農工大学（東京都府中市） 参加者：20名
オンラインゲスト：伊藤三男さん（四日市再生「公害市民塾」／高校非常勤講師）
会場ゲスト：清水万由子さん（龍谷大学・公害資料館ネットワーク幹事）、
神長唯さん（都留文科大学・公害教育研究会幹事・公害資料館ネットワーク幹事）

公害資料館ネットワークの「教育研究会」は日本環境教育学会の「公害教育研究会」と連携しています。2022年8月に開催された日本環境教育学会第33回年次大会の際に開かれた「公害教育研究会」の開催報告です。

公害教育研究会開催記録

都留文科大学・公害教育研究会幹事・
公害資料館ネットワーク幹事 神長唯

日本環境教育学会の常設研究会の一つ「公害教育」研究会（代表：高田研）は会場と三重県をオンラインで繋ぐハイブリッド方式で実施した。

今回、「公害経験の継承と公害資料館—四日市を事例として—」をテーマに『公害スタディーズ』（2021、ころから）の「公害資料館への招待」執筆者の清水万由子さん（理論編）×神長唯（実践編）、同書に写真提供した伊藤三男さんをゲストに迎えた。

2022年7月は四日市公害訴訟判決50周年という大きな節目であった。2015年に開館した「四日市公害と環境未来館」は、市立の公害資料館である。「語り部」として当時を伝える人材が少なくなっている。公害資料館が果たすべき役割はますます大きくなっている。次世代に公害の教訓を繋ぐという観点から、今回は四日市のケースを取り上げた。



開催趣旨を説明する筆者（左）と司会の古里貴士さん（右）

まず、「四日市大学における教育実践」として、地元高等教育機関による公害資料館を活用した教育実践例を紹介した。大学生の想像力や共感力を育む上での現状と課題を共有した（神長）。

続いて、「公害資料館ネットワーク」設立時より関わる清水さんより「公害資料館を未来に向けて

活用するために」と題し、公害資料館がもつ効力を説明いただいた。「生乾きの過去」である、過去になりきっていない今だからこそ様々な当事者から話が聴けるタイミングであると力説された。

いわば公害「非体験世代」2名の話を受け、最後に伊藤三男さんより支援者として反公害運動に関わってきた立場からお話をいただいた。

伊藤さんら若者による「市民兵の会」の被害者支

援活動の様子をおさめた半世紀前の貴重な写真もスクリーンに大写しにして解説された。画期的とされた「米本判決」の精神が果たして今に活かされているのか、コロナ禍で問われる「経済か命か」が当時すでに判決内で指摘されていた点を改めて確認し、現代社会に警鐘を鳴らした。公害は終わっていない、という証左である。

書籍紹介

青空のむこうがわ 四日市公害訴訟判決50年—反公害を語り継ぐ—

伊藤三男著 風媒社 2022年（1800円+税）



判決から半世紀、2022年7月24日に出版されたのが本書である。著者は、高校教師の傍ら、当時から支援者として関わり続けており、現在も四日市再生「公害市民塾」の一人として四日市公害を語り継ぐ活動を続けている。前半は「I 四日市公害との戦い」、「II 判決以後50年に起きたこと」、「III 四日市再生のために」の3部構成で50年を振り返る。後半は原告の故・野田之一との対話や、「四日市公害と環境未来館」の設立には欠かせない存在である四日市公害の「記録者」故・澤井余志郎の生涯を振り返る「よしろう小伝」などが掲載された、必読の書である。（神長）

資料研究会を開催しました

「熊本大学文書館における水俣病関係資料のアーカイビングと課題」

日 時：2022年10月29日（土）13時～16時

参 加 者：25名 開催方法：オンライン

ゲ ス ト：香室 結美さん（熊本大学文書館）

コメ ント：蜂谷 紀之さん（元国立水俣病総合研究センター）、菅 真城さん（大阪大学）



香室 結美さん

蜂谷 紀之さん

菅 真城さん

進行：清水 善仁さん

資料研究会では2022年10月29日（土）にオンラインにて研究会を開催し、熊本大学文書館の香室結美さんより、同大学において保存されてきた水俣病関係資料をはじめ、近年寄贈されたチッソ水俣病関西訴訟関係資料などの所蔵資料と文書館の沿革について紹介いただくとともに、資料の整理・公開・活用といったアーカイブ活動をめぐる成果や課題等についてお話しいただきました。あわせて、蜂谷紀之さん（元国立水俣病総合研究センター）、菅真城さん（大阪大学アーカイブズ）よりそれぞれコメントをいただきました。

資料研究会に参加して

広島大学文書館 北浦 康孝

私が公害資料館ネットワークの会員になってからまだ一年ほどであるが、各公害資料館やネットワークの活動に参加して感じるのは、その記録を残して、個人や家族・地域の権利を守るとともに、現在および将来に公害の実相とそれを取り巻く社会のあり方を伝えていくとする強い意志である。

今回の香室氏による報告も、水俣病の当事者や関係者・資料所蔵者らの思いに応えようと、そのあり方を模索しながら活動する熊本大学文書館の現状と課題を紹介するものであった。以下、同じ大学の文書館に勤める者の立場から所感を述べたい。

熊本大学文書館は現在、水俣病関係資料を含む、地域に係わる資料の収集アーカイブ機能を果たしているという。「収集アーカイブ」とはさまざま

組織・個人から資料を集めて整理し公開することをいう。それに対して、行政機関や大学・企業といった組織の資料を同組織の施設で移管・保存・公開することを「組織アーカイブ」という。国立大学の文書館は大学の公文書を保存する組織アーカイブを核とすることが多い。しかし、一般的に行政よりも自由度が高く、研究機能をもつ大学のアーカイブが、収集アーカイブ、しかも熊本大学のように地域にまつわる資料を対象にその役割を担う意



熊本大学文書館

味もまた小さくないと考える。もちろん、地域の資料について恣意的な収集は許されないし、資料の公共性を考慮して他の資料保存施設と受入先を調整することは不可欠である。しかし、所蔵者の思いを最もよく社会に伝えるにはどうすべきか、他に適切な受入先があるのか。これらを十分に検討した上で、大学アーカイブが積極的な役割を果たすことは重要である。香室報告を聞きながらそのように感じた。

また、個人情報の公開判断をめぐる議論にも考えさせられるものがあった。具体的な個人名を伴った記述や語りはより強い訴求力を持つので、その非公開は時に所蔵者らの思いに反する場合があろう。一方で、公開を望まない当人や家族などの思いもまた存在する。公害に関する資料では、いずれの思いもとりわけ強く現れるであろう。資料を提供する者にとって、形式的な判断に傾かず、個人情報保護の理念に従って自問自答を繰り返しながら、理論的な根拠をもって公開の適否を判断することの大切さ。議論を聞き、そして自らの業務を振

り返りながら、そのようなことを考えた。香室氏はまた、所蔵者などとの応答の中から新たな関係性が生み出されていくのではないかと述べた。自問と他者との応答。当たり前ではあるが、これを怠ってはならないのである。

最後に熊本大学文書館への期待を述べておきたい。参加者からの意見にあったように、水俣病の実相を継承していくには、資料の収集のみならず、行政に対して公文書の適正な公開を求めることが大切である。そして、言うまでもなくこれは公害問題に限ったことではない。そのように考えると、熊本大学文書館には、収集アーカイブのみならず、同大学の公文書を適正に移管・保存・公開する組織アーカイブの役割も期待せざるを得ない。現段階でそれは将来的な課題に止められているが、そのようなアーカイブ構築の積み重なりが、ひいてはアカウンタビリティ（挙証説明責任）を当然とする社会の実現へつながるはずである。熊本大学で組織アーカイブを担うことができるのは文書館をおいて他にないのである。

check !

ネットワーク会員 限定 映像 !!

公害資料館ネットワークでは、Youtube で動画配信を行っていますが、研究会など一部は会員限定公開となっています。

今回開催した資料研究会も会員限定で当日の映像を公開しています。会員の方には、会員用メーリングリストでご案内していますので、ぜひご覧ください。

またネットワーク会員も募集しています。詳しくは裏表紙のご案内をご覧ください。

公害資料館 バザール



バザールのように、あっちの公害資料館ではこんなことしてる、こっちの公害資料館はこういうことがわかるんだ！と、気軽に知ることができればいいなと思い、動画でそれぞれ公害資料館を撮影して、紹介する取り組みを始めました。聞き手は公害資料館ネットワークの役員が務めます。3年間かけて各地を回りたいと考えています。

水島編

バザール第1弾は、2022年10月15日にオープンした「みずしま資料交流館（あさがおギャラリー）」のオープニングイベントの一部を生配信するとともに、後日編集して公開しています。お話を林美帆さん（みずしま財団）、聞き手は除本理史さん（大阪公立大学）。水島の成り立ち・歴史から、グルメまで。38分と14分の短縮バージョンがあります。（白神加奈子）



水俣編

2023年1月・2月に、国立水俣病研究センター「水俣病情報センター」と水俣病センター相思社「水俣病歴史考証館」と打合せしました。水俣病情報センターは2023年度にリニューアル予定とのことです。おすすめのグルメで話が盛り上りました。今年5月ごろの撮影を目指して調整中です。（林美帆）



足尾・渡良瀬編

明治期に端を発する「足尾銅山鉱毒事件」。その被害は、銅山周辺の足尾町（現・日光市）だけでなく、渡良瀬川を通じて、栃木・群馬・埼玉・茨城など広範囲に及びました。バザールではぜひ「足尾・渡良瀬編」を作りたいとの考えから、2022年11月、群馬県館林市にあるNPO法人足尾鉱毒事件田中正造記念館を訪問・見学してきました。（友澤悠季）



動画ページ 公害資料館ネットワークチャンネル

公害資料館バザールをはじめ、長崎や福島でのプレ企画の映像など公開しています。また一部は、ネットワーク会員限定のコンテンツもあります。限定映像はマーリングリストからのご案内にそってご覧ください。また、コンテンツの作成にご協力いただける方を募集中です。

https://www.youtube.com/@kougai_nw



大阪・西淀川編

2022年12月22日、公害資料館の魅力を語る「公害資料館バザール」の第2弾として大阪・西淀川の「あおぞら財団付属西淀川公害・環境資料館（以下、エコミューズ）」を紹介する動画を撮影しました。

エコミューズの鎌山善理子さんとの対談形式で、エコミューズの活動について、あれこれ伺いました。“撮影秘話”というほどの事件も起こらず、あっさりと終了（笑）。慣れない動画撮影でしたが、鎌山さんがとてもわかりやすく、親しみやすい語り口で話してくださいましたので、聞き手としてもあまり緊張せずに楽しく撮影することができました。撮影後は、公害資料館ネットワークの白神加奈子さんが、大事なところを上手に切り出して編集してくださいました。字幕や写真もうまく使って、エコミューズの多彩な活動が伝わる動画になったのではないかと思います。よき編集者の存在を、とても心強く感じました。

エコミューズで「公害資料館バザール」の動画を作成するという企画が持ち上がったのは、撮影日から半年ほど前だったように思います。まずは動画の構成案を考えて、エコミューズの運営メンバーと、公害資料館ネットワークのバザールチームの両方で、意見をもらいながら構成を練りました。

その後、使えそうな写真やインタビュー動画を少しずつ撮っていました。エコミューズには、ゼミ生を連れて来たり、論文を書くための資料調査に来たり、小田館長との所蔵資料勉強会に参加したりと、よく利用しています。そのたびに、「あ、これはバザールの動画に使えそう！」と思ったことを付け加えて、少しずつイメージを膨らませていきました。鎌山さんも、構成に合わせて紹介する資料やエピソードを考えてくれていたので、当日の台本は用意せず、構成に沿って“ぶつけ本番”で話を進めてきました。

私はあおぞら財団とは長いお付き合いですし、エコミューズに日頃から来ているので、エコミューズの何をどのように紹介しようかと悩むことなく、構成を考えることができました。ただ、「公害資料館バザール」は公害資料館が自己PRするのではなく、公害資料館ネットワークのメンバー（役員）が、外からの目線、あるいは利用者の目線で公害資料館を紹介するコーナーです。ついついあおぞら財団の立場を勝手に忖度してしまう私ですが、今回の動画作成で、改めてエコミューズの特徴って何？魅力に感じるポイントは？と考え、語ることができました。（ぜひ、ロングバージョンをご覧ください！）。



公害スタディーズ

悶え、哀しみ、闘い、語りつぐ

安藤聰彦・林美帆・丹野春香 編 ころから 1,800円+税



『公害スタディーズ』は公害資料館ネットワークの会員の方をはじめ、ご関心を寄せられている多くの方にご協力をいただき 2021年に出版されました。私たちは、今も公害は「過去のこと」や「克服されたもの」という認識が根強く残る状況の中で、公害にほとんど触れる機会を得てこなかった人たちが〈公害と出会い、向き合う〉ための「入り口」になることを企図して本を編みました。

本書は2部構成になっており、第1部「出会い」では13の公害をテーマにその概要が示され、また被害者をはじめさまざまな立場の方から公害の経験が語られています。第2部「向き合う」では、公害と向き合うための学びと社会のあり方に関し、さまざまな問い合わせられています。またカラー刷りをはじめ、コラムや用語解説、写真・図説を多用し、手に取りやすく、理解しやすい工夫を施しています。

巻頭と巻末に公害資料館の情報が掲載されているのも魅力の一つです。さらに今回、電子書籍版としてもご購入いただくことができるようになりました。電子版だからこそ、持ち運びや検索のしやすさなど利便性が高まっていることもアピールしたいポイントです。

編者の一人として私は、本書を用いた公害の学び合いが生まれていくことを願っています。そのためにも、公害の学びをつくる・支える役割を担う方に本書を活用していただき、その方法や課題について議論が深まっていくことが重要だと思っています。さらに、公害の学びをつくる・支える役割を担う方も学習者と共に学ぶことを通し、公害を学び合う輪は大きく、太くなっていくのだと思っています。

ぜひ『公害スタディーズ』を手に、公害の学びの世界へ。

公害スタディーズ編著者、埼玉大学、明治大学、立教大学、
国立療養所多摩全生園附属看護学校非常勤講師・兼任講師
丹野 春香

「公害資料館ネットワーク共通パネル」の 貸し出しをおこなっています

2018年度に作成した「公害資料館ネットワーク共通パネル」ですが、各地の公害資料館をはじめ、人権に関する展示などでも活用いただいています。扱いやすいB2版(515mm×728mm)7枚のパネルで、写真やイラスト豊富なフルカラー印刷。公害が起きた時の地域の様子が立場別でわかります。SDGs(持続可能な開発目標)を考えるきっかけにもなりますので、ぜひご活用ください。

- パネル貸出は、リンク先の注意事項を確認の上、申込フォーム、メール・FAXでお申し込みください。

<https://kougai.info/action/panel>

なお、【公害資料館ネットワーク 団体会員】の場合、送料のみで貸出可能です。



和泉市立人権文化センターでの展示の様子